

# 絵本「おおきな木」の臨床心理学的考察

— 計量テキスト分析を用いて —

三林 真弓

## 要 旨

この論文では、研究 I として、ほんだきんいちろうが訳した絵本「おおきな木」(Shel Silverstein, 1964b/1976) を巡る論考についての文献研究をおこなった。研究 II では、世代の異なる「学生群」(N=144) と「母親群」(N=30) の感想を計量テキスト分析から考察した。研究 I では、「おおきな木」が日本の母子関係にみられるエッセンスが豊かに含まれていることを「甘え」や「母性」とともに考察した。そして、成長過程での母性の望ましいあり方について仮説を試みた。研究 II では、若者世代、親世代ともに「おおきな木」の絵本に心が動いたことが分かり、その世代ならではの経験や人間関係を絵本に投射していたことも明らかとなった。

**キーワード** 絵本、「おおきな木」、計量テキスト分析

## はじめに

「0歳から99歳まで読みかた100通り!」。ほんだきんいちろうが訳した絵本「おおきな木」(Shel Silverstein, 1964b/1976) の帯には確かこのような文言が附されていたように記憶している。絵本は、子どものために書かれたものという先入観が強いかもかもしれないが、年齢を問わないばかりか、むしろ生きた年齢によって響き方が違っていつまでも誰でも楽しめる絵本であると唄っている。果たしてどのように読み方が変わってくるのだろうか。本稿では、「おおきな木」を巡る論考についての文献研究とともに世代の異なる読者の感想を計量テキスト分析から考察する。なお、今回「おおきな木」として研究題材に挙げた本は、専ら1976年に本田錦一郎によって訳された絵本を扱うこととする。

## 研究 I 絵本「おおきな木」とは—文献研究

### 1) 原作者について

原作者 Shel Silverstein (1930-1999) は、一風変わったキャラクターの持ち主で、シンガーソングライターとして意味深な歌を歌ったり、

Play Boy 誌に漫画を載せたりしながら、ジブシー生活を好んでいたという (Baughan, 2008/2009)。絵本の裏表紙には、髪を剃り豊かなひげを蓄えた敵つい作者の顔写真が添えられている。「おおきな木」は彼の絵本ジャンルにおけるデビュー作となった作品で、原著には、「*The Giving Tree*」(与える木) というタイトルが付けられている。まず、筆者の解釈も含めながら、絵本のページを順を追って紹介する。

### 2) 物語・挿絵の解説 (タイトルの次ページから見開き1ページ目とする)

- 1 ページ; シンプルな一本の木 (樹冠は見えない) と「むかし」というオーソドックスな語りで始まる。
- 2 ページ; ちびっこの片足の先の方だけが右端に描かれているが、充分、木に向かって歩いてくる様子が想像できる。
- 3 ページ; やあとちびっこが右手を挙げると、木の枝もいらっしゃいと言わんばかりにちびっこに差し出されている。
- 4 ページ; 木の葉が落ちるシーンは、この後も

- みられるが、このページではちゃんとちびっこの伸ばされた手の上に落ちている。
- 5ページ；集めた木の葉で冠をこしらえて、王様気取りで歩くちびっこに対し、木は背は高いながらも、家臣のように頭を下げて服従するように描かれている。
- 6ページ；木によじ登るシーン。手足のみが描かれ、しっかりと身体と木の幹が密着している。まるでちびっこが木におんぶされているようで、母子共生を印象づける。
- 7ページ；枝にぶら下がるシーン。膝から下の足だけ描かれていて、他はすっぽり木の枝と葉に包まれている。ちびっこが見えない分、木の中に取り込まれ、融合している。また、靴が勝手に脱げて地面に落ちているところからも、枝葉に抱かれすっかり気持ちよく休んでいるようである。
- 8ページ；ちびっこの姿は描かれず、食べたあとのリンゴの芯がふたつ描かれている。リンゴはこの木の実である。まるでちびっこは、木からおっぱいをもって吸っているかのように、すっぽりと木の中に入って一体化している。
- 9ページ；ふたりでかくれんぼう。ちびっこが隠れ、まるで木が「見いつけた」と言わんばかりに枝の先がちびっこの頭上に描かれている。かくれんぼうという遊びは、以前にも触れたことがあるが（三林、2000）、親子間、あるいはそのほかそのときキーパーソンとなりうる人とのあいだで、「隠れる」、「待つ」、「探す」、「見つける」、「出会う」の行為が取り交わされ、見つけ出してもらったたびごとに相手に見せる自己を変容（成長）させてゆく。幼い頃の一時期、安心できる人と緊張と緩和を繰り返しながら、笑顔で出会う、成長には欠かせない象徴のような遊びだと筆者は考える。
- 10ページ；遊び疲れて眠るシーン。木に寄り添い、抱かれて眠る。まさにこの前半の見開き10ページ分を通して、ちびっこは「くうねるあそぶ」を木とともにやってのけるのである。
- 11ページ；ちびっこの心情から先に語られる。木にしがみついて大好きな感情を表しており、木もふたつの枝葉をからませてちびっこの気持ちに応えている。
- 12ページ；下幹にハートマークを彫り、「たろうとき」と記す。ちびっこには人として「たろう」という名前があり、しかし、木には名が無いところで、ちびっこと木との個としての存在の違いに気づかされる。木もこのシーンではまっすぐに伸びていて、2人が同じくらい大好きで、愛情を確認し合っている姿に見える。ただ、「だから きも うれしかった」という受動的な喜びであり、「きはちびっこが だいすき」という表現にはされていない。
- 13ページ；ここでぐっと時間が進む。ちびっこは青年の姿になり、木に背中をもたれかけている。木が葉っぱをちびっこの目の前に落としても気付かず、物思いにふけている。
- 14ページ；上半身は見えないが、「たろう」と「はなこ」が木にもたれかかって2人だけの世界を過ごしている。ここで木が今度は2枚の葉を散らす、全く2人の眼中にはないようである。
- 15ページ；ひとりぼっちの木は、生い茂った枝葉を広げて迎える相手もおらず、自らの枝同士をからみあわせるだけである。
- 16ページ；久しぶりにちびっこが現れる。「さあ ぼうや わたしのみきにおのぼりよ。わたしの えだに ぶらさがり りんごをおたべ。こかげで あそび たのしく すごしておゆきよ ぼうや。」ここから急に文字数が多くなる。小さい頃は言葉のやりとりなど無かったのに、お互いにそうしなさい、そうして欲しい、と言ったやりとりをする。やりとりはしていても、久しぶりでお互い感覚がつかめず、それでも関係をつなぎ止めた木への思いが伝わってくる。木がぼうやと相対するとき、ここでは反った姿勢で描かれている。対決とまではいかないが、ある種の緊張感をうかがわせる。
- 17ページ；リンゴが地面にたくさん落ちている。男の子の上半身は木に埋もれて見えないが、6、7ページの絵のような一体化した感じには見えず、むしろ成長し脚も長くなった男の子の作業に、木は圧倒されているかのように、

- より一層しなっている。
- 18ページ；このページも字数が多い。ひょっこり戻ってきたぼうやの姿は木と距離をもって描かれ、木がまるで手招きをしているかのように両枝の先をくると手前にカールさせている。活字で大部分のスペースが満たされている分、そこに虚しさも表れている。
- 19ページ；木の姿は左端に描かれ、おとこが自分の身体の何倍もの量の枝を背中に背負って行こうとしている。担いだ枝から、はらりと一枚の葉が落ちる様が描かれているが、それが木の涙のようにも見える。が、しかし、男はまたそれに気がつかないでいる。
- 20ページ；枝葉のない木。「きは それでうれしかった」という一文だけで、ページの大部分がスペースである。おとこの作業のあっけなさや木の虚しさ、おとこを見送って手を振る、その枝さえももう奪われてしまった。
- 21ページ；左全面は活字で字数が多い。珍しく右側に木とおとこの両方が描かれ、随分距離は近い。しかし、木の幹がこれまでのように一筆で描かれておらず、ごつごつし疲れたような表情である。また、根元に草がたくさん生えており、随分と時間が経過したことがわかる。おとこもすでに中年期でめがねをかけた帽子をかぶっている。
- 22ページ；船を作るために幹を切り倒して運ぶシーン。おとこの手と下半身のみが幹とともに描かれている。おとこの頭がページから見切れてしまうくらい、もう木のことなど顧みず、立ち去って行ってしまったふうである。切り株になった木には、ちびっこが彫った「たろう と き」が残され、踏ん張っておとこの後ろ姿を見送るかのような様子である。ページの上半面はなにもなく、生い茂った枝葉やがっしりとした幹、そしてぼうやと戯れた時間はまさに夢の跡となってしまった。
- 23ページ；ずっとぼうやに自分の身を削り、与え続けてきた木がこのページでふと立ち止まる。「きは それでうれしかった……」、「だけど それはほんとかな。」ここで読者も立ち止まる。木の本当の気持ちってどんなだろう。活字にされていない木の気持ちを誰しもが推し測ることになる。このページでは、随分右側に切り株が描かれており、ハートの彫り物はその体をなしていない。「だけど それはほんとかな。」は、まるでストーリーからいったん離れ、作者が読者に向けて投げかけたメッセージのようにも取れる。また、作者の単なるつぶやきとも取れる。記者である本田のこの見事な訳し方のおかげで、エッジの効いたページとなっている。
- 24ページ；さらに年月が経ち、老人となったおとこが帰ってくる。おとこは左手を木に伸ばすが、木はハートの彫り物も反対側にあるし、若干のけぞって相対しているように見える。あげるものが何もない故の申し訳なきなのだろうか。それでもぼうやのことを忘れていないことには、そのハート型に「たろう」としっかり読めるように描かれているところからもみて取れる。右手よりも左手が動くときというのは、無意識に退行しているときが多い（三林、2008）。いかにも年寄りに描かれたおとこの左手が思わず伸びたのには、血気盛んな時期を経て背もずいぶん縮み、どこか幼い頃のちびっこを彷彿とさせるようでもある。
- 25ページ；何も欲しい物を要求しないおとこは、最後に「すわって やすむ しずかな ばしょが ありさえすれば。わしは もう つかれはてた。」と言う。ぼうやに何かしてあげたいと願う木は、精一杯背筋を伸ばし「このふるぼけた きりかぶが こしかけて やすむのに いちばんいい。さあ ぼうや こしかけて。こしかけて やすみなさい。」と声をかける。樹木は人間の寿命に比べたらはるかに長く、歳の取り方が違うはずである。絵では年老いたように見えない木が自分のことを「ふるぼけたきりかぶ」と敢えて人間目線で自嘲的に呼ぶ。そして、今やよぼよぼのおとこを「ぼうや」と変わらずに呼び続けるところに、木の時間を超えてもまったく変わらないこのおとこへの愛情が描かれている。おとこは、ただその言葉に従い腰を下ろすが、自分自身にも、そして木にも、さして感情を寄せることはなく、しばし遠くを見つめている。
- 26ページ；「きは それでうれしかった。」で

締めくくられる。これまでより小さく木とおとこが右側中央に描かれている。読者も、必然的に俯瞰で木とおとこを見ることになり、この絵をどのような気持ちで眺めるかは各々に委ねられた形になっている。ただ、最後の最後で、木は「うれしかった」のである。

「ほんとかな。」という疑問はこのページにはない。

### 3) 「おおきな木」の考察～母性愛について

翻訳者の本田錦一郎は、本書のあとがきで、児童書には珍しくひとつの確固たる思想がよこたわっていると述べている。つまり、「『自由からの逃走』(Escape from Freedom 1941年)の著者、エーリッヒ・フロムが、かつて愛を論じたとき(『愛するということ』The Art of Loving 1956年)、「愛とは第一に与えることであって、受けることではない」と主張したのを、記憶している人も多かろう。これこそ、この物語に貫流する中心的思想なのである。」と述べている。さらに、「「与える」ことは人間の能力の最高の表現なのであり、「与える」という行為においてこそ、人は自分の生命の力や富や喜びを経験することになる。～(中略)～母性愛さながらに。～(中略)～りんごの木が、ただひたすら喜びだけを見出していたことに読者は注目すべきである。すなわち、エーリッヒ・フロム同様、シルヴァスタインにとっても、「与える」ことは、あふれるような生命の充実を意味しているのであって、犠牲的喪失を意味しなかった。こうして、一箇の切株になっても、なお「与える」ことを忘れないりんごの木に、言い知れぬ感動があるなら、その感動こそ、「犠牲」ならぬ真の「愛」のもたらすものにほかならないのである。」(本田、1976)として、「木」に自己犠牲の姿をみるべきではない、これこそ真の「愛」なのだと言っている。

本田錦一郎亡き後、別の出版社から新たに出された「おおきな木」の翻訳者である村上春樹は、そのあとがきで、この物語には「奥行きのある感情」つまり「美しい感情があり、喜びがあり、希望の発芽があるのと同時に、救いのない悲しみがあり、苦い毒があり、静かなあきら

め」があると述べている(村上、2010)。また、原文では「木」が「彼女(She)」として書かれてあることから、「多くの人はこの木を母性の象徴としてとることでしょう。」と述べている。

以上のことから翻訳者ふたりとも、絵本「おおきな木」に母性的な深い愛情を感じ取っていることが分かる。

この「母性」、「母性愛」というのは元々日本語にあった言葉ではなく、スウェーデンの教育学者・女性運動家であるエレン・ケイのmoderskapの訳語として、日本では大正時代の初めの頃に登場した(香山、2010)。登場後、時代とともに一気に広まり、1960年代頃から女性が社会で活躍するようになってもおお、並行して「3歳児神話」が浸透するなど「母性」や「母性愛」が根強いものになっていったのである。(もちろん、今現在では「母性」・「父性」は、男女ともに併せ持つ性質であると定義されていることは言うまでもない。しかし、社会通念上、母親に母性を、父親に父性をみることのほうが了解がしやすいということである。)土居(1971)は、「甘えの心理的原型は母子関係における乳児の心理に存する」と述べている。乳児がおぼろげに自分と母親は別の存在であると知覚するときに、密着を求めるのが「甘え」であり、よって「甘えるということは結局母子の分離の事実を心理的に否定しようとするものである」と述べ、日本では、甘えの心理が独特に支配的であり、非論理的直感的なものでもあると述べている。さらに、「甘え」をフロイトの同一化の概念と同様のものであることの一例として、親子関係の「甘やかす」について説いている。「甘やかす者」(親)が相手(子)と同一化しているため、「親が子を甘やかすと、子は甘えた風を見せても、本当には親に甘えられなくなる。それは甘やかす方が相手に甘える関係になるからである」とある。このことを「木」と「男の子」の関係でなぞるなら、「木」は「男の子」に与え続けていたわけであるが、それは目に見える物のやりとり上のことであって、「木」も「男の子」に甘える関係にあったからこそ、与えるという行為がなされたということになる。そして「男の子」が欲求のままに

要求をしてくる（甘える）その都度、支配的また非論理的直感的に「木」は自らを提供した（甘やかした）のである。土居は、「甘え」は日本人特有の概念であるというが、このようにみえてくると、アメリカ発の「おおきな木」は、なんと日本の母子関係を彷彿とさせるような枠組みで描かれていることだろうか。

「母性」、「母性愛」というと、生きとし生けるものが育つためになくしてはならないもの、誰しものがあこがれる崇高なものとして定義づけされるだろう。しかし、同時にネガティブな点も指摘しておかなければならない。「母性を、とりわけ個人の次元で考えると、私たちは“否定的側面を併せ持つものとしての母性”という視点を決して忘れてはならない」と高石（2003）は述べている。C.G.ユングは、母性として3つの性質を挙げているがそのなかのひとつ「冥府的暗黒」は、「呑み込み、死者の世界へ引き戻す」否定的な側面を指すものである。ユングは、普遍的にあらゆる人の心の深層に「グレートマザー」が存在すると仮定した（高石、2003）。河合（1997）は、日本のさまざまな青少年や大人の問題の原因は、彼らが母親に過度に依存したために依存性が高まり、大人として社会に出る強さを身につけていないからであるとして、日本の根底に母性社会の病理があることを指摘した。母性社会が行き過ぎると、不登校、ひきこもり、あるいは精神障害というものが生ずることを明らかにしたのである。河合（1978）は、次のように述べている。「母性というものは、最初は子どもにとってかけがえがなく、有り難いものである。これなくして子供が育つはずはない。しかし、子どもの自我が育とうとするとき、むしろそれは重荷として感じられる。あるいは、もっと強く迫害的にさえ受けとられる。つまり、母性が自我の確立を迫害するかのように感じられるのである。日本全体における、このような漠とした認識が日本文化のなかの母性優位性に対して向けられていることと並行して、現在の青年たちは、自分の母親に対して被害感を感じるが多い。これは実のところ、一個の人間としての母親の人格と関係なく生じてくる心性である。多くの若者は

母親に対して、無制限の援助を要求し、それを当然とする一方では、母親を圧迫者として攻撃しようとする。アンビバレンツ（相反性）に耐えられず、母親に暴力を振るうような子どもが増えてきたことも事実である。」果たして、「おおきな木」の「木」もユングのグレートマザーのイメージをもつものなのだろうか。「男の子」は、心理的離乳、自立、自我同一性の確立の際にこのグレートマザーと対決したのだろうか。

「木」は「男の子」にとって人間的成長を阻む存在になったのだろうか。確かに「さあ ぼうや……」の呼びかけは、「男の子」の成長を無視した、阻止したものとしてもとられなくはない。しかし、その呼びかけに対し「男の子」は「ぼくは もう おおきいんだよ きのぼりなんて おかしくて。」と取り合わない。しばらく「木」のところに来なかった「ぼうや」は、そのあいだに個としては健全に自立できたのかもしれない。しかし、自立の途中でやはり木のところに来る、母性を求めてやってくる。個の重視は、母性の否定にもなりうる。またその逆も然りである。しかし、そうではなくて、大地に根を張った不動の「木」だからこそ、ただ「ぼうや」が来るのを待つしかなかった。「木」は、変わらずそこに行けば会える相手であり、常に港のような存在で、人生の分岐点に立った折々で、「ぼうや」には欠かすことのできない居場所となっている。自分の内なる「母性」を育むのは、「ちびっこ」として「木」を愛し、また愛された経験が確かに幼少期にあったという確固たる信念にほかならない。そして、その後の人生においていうならば、与えられる母性は、人間のらせん状にある成長過程のなかで、その距離を遠ざけたり縮めたりしながら、生涯なくてはならないものとして変わらずあるともいえるのではないだろうか。

## 研究Ⅱ 異世代間の「おおきな木」への感想—計量テキスト分析を用いて

### 1) 先行研究

研究Ⅰからも分かるとおおり、幾通りも読み解きができる「おおきな木」は、単なる絵本の域を超えて研究がなされている。守屋（1994）は、

「馬鹿げたファンタジーの世界」は「現実には似た世界」ととらえ直すことによって「現実の世界」に関係づけられようとしている。」と述べ、本書の解釈の仕方を国別に比較した。日本・韓国・英国・スウェーデンの4カ国で、それぞれ「木」をどのようにイメージしたか（(母)親、友人、自然、神のいずれか）を7歳から17歳の子どもたちに尋ねた結果、日本は、他国に比べて圧倒的に“母（または父）あるいは親”とみなした場合が多かった（80%弱）。韓国では、“親”とほぼ同率で“自然”をとらえる場合が多く、英国では、“親”が最も割合は高いものの40%弱にとどまっており、4カ国のなかで“神”をとらえる場合の割合が最も高かった。スウェーデンは、“友人”をとらえる場合が多く、次いで“自然”、“親”の順であった。この研究を受け、植田（1996）は、20代から50代の344名の母親を対象に本の感想を尋ね、本書に「親子関係」を投影するのは日本人の特徴であると結論づけ、日本人母親の子育て観について考察している。柁木（2012）は、大学の英語の授業で学生に本書（原著）を訳してもらったあと、ふた通りの翻訳（本田錦一郎と村上春樹）を読み比べし、特に「無償の愛」についてアンケートを採っている。浜野（2015）は、本書を授業教材として「与える」ことと「与えられる」ことについて、小学5、6年生に向けた道徳の授業を提案している。

これまでの研究では、国別比較研究はあるものの世代間比較研究はみられない。また、感想やアンケートの集計などは、カテゴリー分けされ、内訳をみるまでにとどまっている。そこで、本研究では、単なる年齢層の比較ではなく、若者（独身）と親の立場の違いからみえる世代間比較をおこないたい。つまり、若者世代と母親世代の2グループに絵本の読み聞かせをしたあとに感想を書いてもらい、計量テキスト分析を用いて検討したいと考えた。

## 2) 調査の目的

「おおきな木」（1964b）に対する読み聞かせの感想が、学生と母親とではどのように違うのだろうか。世代間で共通するもの、世代ごと

の特徴などを把握することを目的とする。

## 3) 調査の方法

### ①調査対象者と時期

【学生群】大学生145名（女子80名、男子45名）。2016年度と2017年度に筆者がおこなった授業の履修生（2年次生以上）のうち、本調査への協力に同意して回答した学生のみを有効データとして扱った。

【母親群】母親30名（平均年齢43.0歳、標準偏差8.3）。2015年度と2017年度に筆者がおこなった講習の受講生のうち、本調査への協力に同意して回答した母親のみを有効データとして扱った。

なお、調査にあたっては、インフォームド・コンセント（回答は任意であること、回答者個人を特定して研究に使用しないこと）を口頭でおこない、本調査への協力に同意したのもののみ調査対象者とした。

### ②調査手続き

筆者が「おおきな木」（1964b）の読み聞かせをおこない、その後、自由記述で感想を求めた。母親群は、いわゆる一般的な集団による読み聞かせ（読み聞かせをする筆者が扇の要の位置に立ち、対象者には扇形に椅子に座ってもらって聞くスタイル）であったが、学生群は、人数が多かったため書画カメラを使用した。

筆者の読み聞かせについての感想（声のトーンなど）も含まれていたが、今回の分析からは省き、あくまでも本の内容についての感想のみを有効データとした。

### ③分析方法

計量テキスト分析をおこなうためフリー・ソフトウェアである *KHCorder2* を用いた。計量テキスト分析とは、「インタビューデータなどの質的データ（文字データ）をコーディングによって数値化し、計量的分析手法を適用して、データを整理、分析、理解する方法である」（秋庭・川端、2004）。樋口耕一（2014）が開発し、2001年から公開を始めた *KHCorder* は、学術分野における自然言語処理についてコンピ

ュータを使って分析することができるようにした画期的なソフトウェアである。平成27年度地域志向教育研究ともいき研究く住民参画型>で報告した研究(金山・三林・山北・迫・吉田、2016)では、3回シリーズのワークに全て参加した3名の母親の語りをKHCorderによる共起ネットワークを描いて分析している。KHCorderを用いた研究は、他にも数多く(例えば、金澤・山本、2016;片瀬、2015, 2016;鳥丸、2015など)、文字なし絵本の作話課題の分析や自由記述形式の自己評価表の分析、記憶の効果測定やSCTの分析など、心理学やその近接領域においても新たな研究法として取り入れられている。今回の分析では、KHCorder2 (Ver.2.00f)を使用した。

なうため、まずKH Corderを用いて形態素解析をおこなった。さらに茶釜を利用して複合語を検索し、必要に応じて強制抽出(学生群のデータでは「ぼうや」、「男の人」、「私たち」、「最終的」、「自己犠牲」、「無償の愛」、「印象的」、「好きな人」、「親子関係」、「世界観」、「安全基地」、「申し訳ない」、母親群のデータでは「ぼうや」、「大好きな子」、「我が子」、「自分自身」、「親子愛」、「母性愛」、「包容力」)をおこなった。また、品詞別の抽出語リストを眺め、分析に用いる品詞を選択した。処理後の学生群と母親群の記述統計量を表1に示す。群の人数比に違いがあるものの、抽出語総数や出現回数の平均については人数に見合った数値であった。

4) 調査の結果と考察

① 記述統計量

感想文の内容について、計量的に分析をおこ

表1. 記述統計量

	学生群	母親群
N	144	30
抽出語総数	816	349
出現回数の平均	5.22	2.75
出現回数の標準偏差	18.15	5.90

表2. 平均回数以上の抽出語リスト

学生群				母親群			
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
木	322	喜ぶ	15	最初	8	木	71
思う	226	来る	15	自分勝手	8	思う	47
男の子	138	話	15	受ける	8	読む	21
感じる	99	求める	14	祖父	8	感じる	20
考える	79	子	13	知る	8	自分	19
自分	77	持つ	13	楽しい	7	人	15
絵本	51	小さい	13	疑問	7	気持ち	14
読む	47	存在	13	強い	7	ぼうや	13
気持ち	46	感じ	12	行く	7	男の子	13
子ども	45	少年	12	残る	7	聞く	13
人	42	身	12	姿	7	絵本	12
本	34	必要	12	書く	7	幸せ	11
与える	34	欲しい	12	深い	7	優しい	10
幸せ	32	犠牲	11	身体	7	心	8
親	32	削る	11	尽くす	7	考える	7
最後	30	枝	11	切り株	7	最後	7
成長	30	出来る	11	聞かす	7	子ども	7
悲しい	30	分かる	11	面白い	7	母	7
優しい	26	変わる	11	離れる	7	戻る	7
嬉しい	24	愛	10	家	6	愛	6
心	24	言う	10	感謝	6	愛情	6
男	24	思い出す	10	私たち	6	相手	6
聞く	24	大好き	10	自身	6	少年	5
一緒	23	内容	10	終わる	6	深い	5
関係	22	良い	10	出る	6	切り株	5
寂しい	22	幹	9	祖父母	6	悲しい	5
見る	20	感情	9	伝える	6	変わる	5
大人	20	言葉	9	伝わる	6	本	5
遊ぶ	20	好き	9	得る	6	立場	5
人間	19	思える	9	難しい	6	思い	4
ぼうや	18	生きる	9	年	6	主人公	4
大きい	18	1つ	8	部分	6	重ねる	4
大切	17	愛情	8	風	6	初めて	4
印象	16	違う	8	物語	6	親	4
切ない	16	会う	8	満たす	6	人生	4
相手	16	形	8	友達	6	成長	4
男の人	16	見える	8	欲求	6	大人	4
かわいそう	15	行動	8	利用	6	伝わる	4

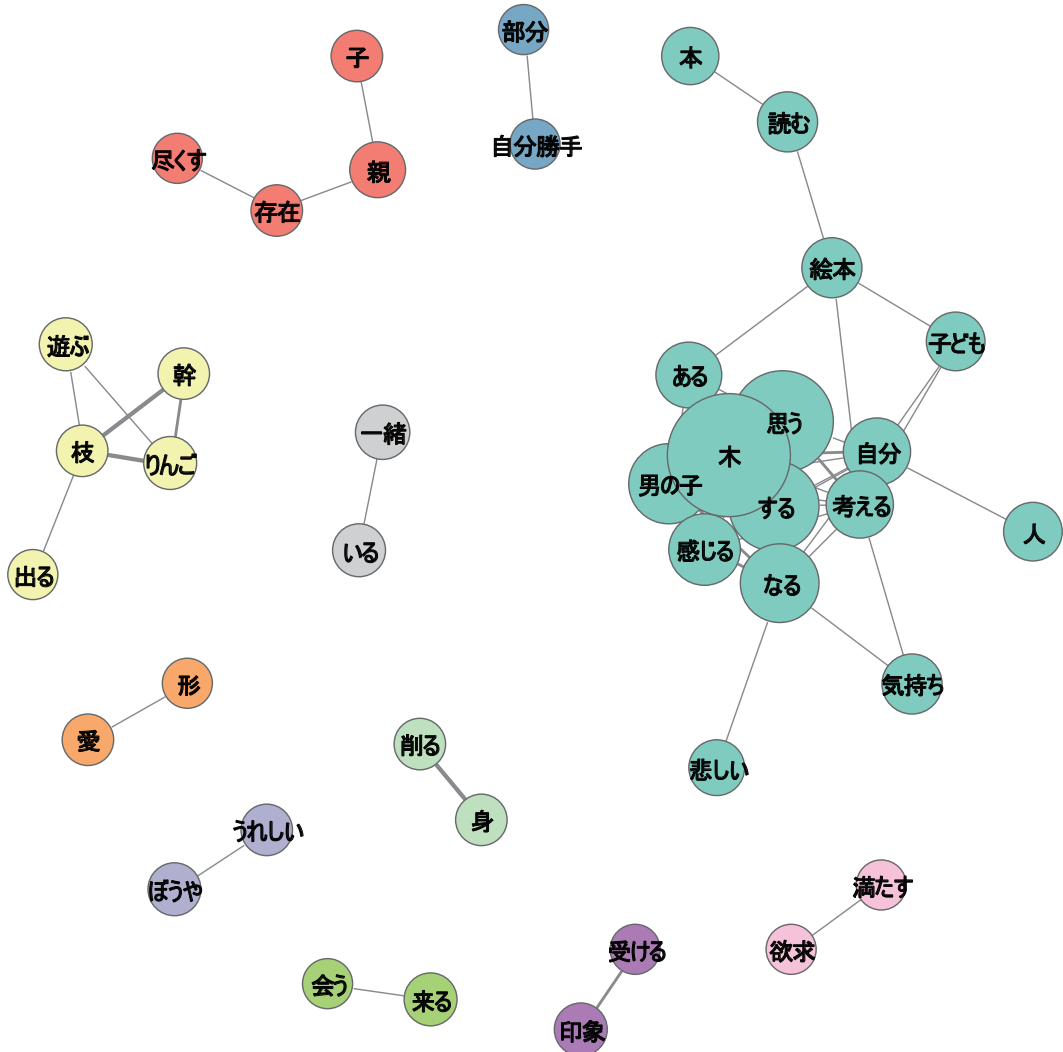


図1. 学生群の共起ネットワーク

## ② 抽出語の出現頻度

次に各群平均回数以上の出現頻度の抽出語を表2に示す。学生群は114語、母親群は61語抽出された。「木」、「思う」、「感じる」、「男の子」、「自分」、「読む」、「気持ち」などが両群とも上位に出現しており、平均以上で学生群のみに現れたのが「嬉しい」、「寂しい」、「遊ぶ」、母親群のみに現れたのが「戻る」、「立場」、「主人公」であった。母親群にみられた「主人公」について、生データの文脈をたどると「男の子」を指す言葉として出現していた(ex.「おおきな木」は聞いていて少し淋しくなった。ハッピーエンドには思えなかったけど、最後にやっ

ぱり戻っていた主人公の心の中には木の存在があり、木はそれが嬉しかった。(以降省略)。絵本自体の主人公は「木」であるが、等しく30名中4名が「男の子」として捉えていたというのは興味深い。

## ③ 共起ネットワーク

各群の共起ネットワークを図1、2に示す。両群とも、平均回数以上の出現頻度の抽出語を対象にした(学生群は6回以上、母親群は3回以上)。図は、強い共起関係ほど太い線で、また、出現回数の多い語ほど大きい円で描かれている。



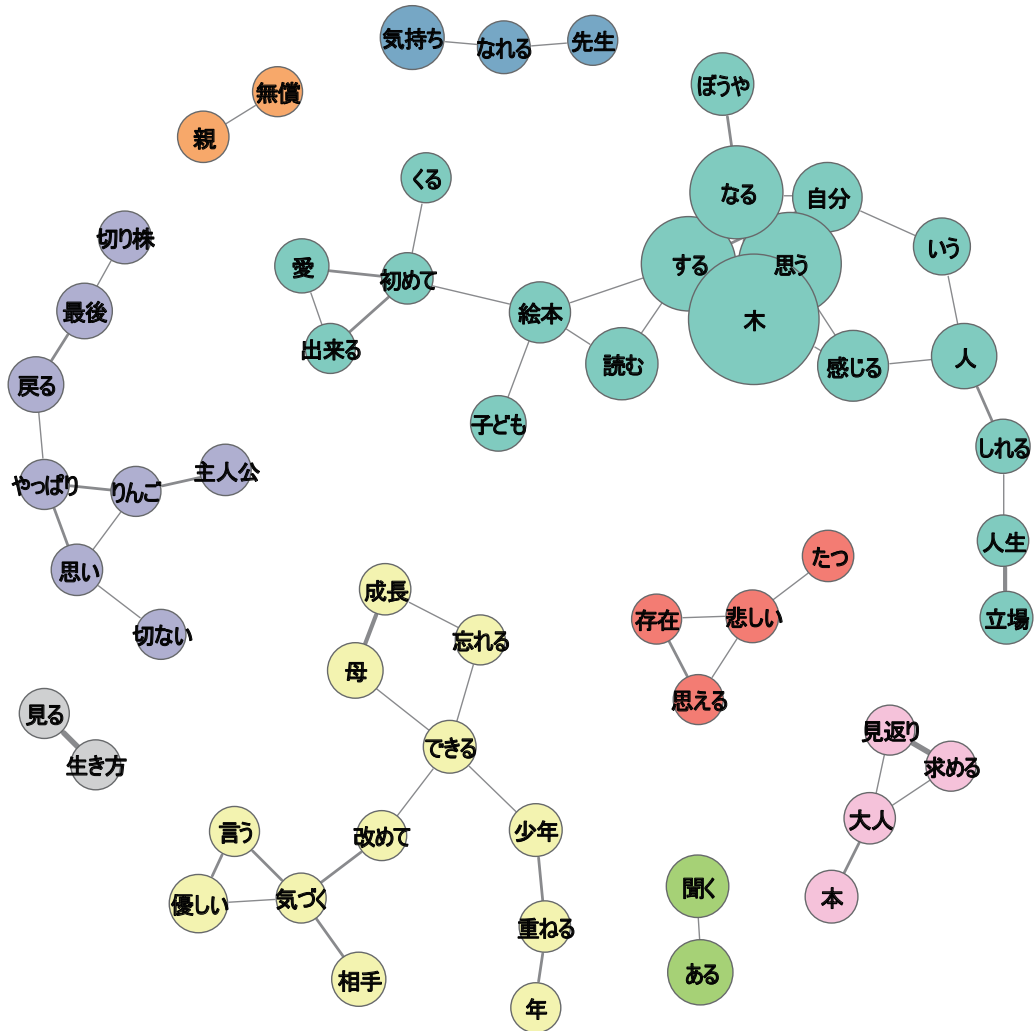


図2. 母親群の共起ネットワーク

両群とも、ネットワークのメインは「木」を中心として「思う」、「する」、「感じる」、「なる」などの動詞に囲まれており、「自分」という言葉とも共起していた。学生群は、そのネットワークが「悲しい」という感情表現と結びついたのに対し、母親群では、「愛」と結びついていた。学生群にも「愛」がみられるが、それは「形」としか結びつかなかった。また、図1の左側のほうに「りんご」がみられ、「幹」、「枝」、「遊ぶ」など、物語の前半部分を描き出したようなネットワークになっているが、図2では、同じく左側のほうに「りんご」がみられるがそれは、「主人公」（本来、この本の主人公

は「木」であるが、生データをたどると「男子」と同義であった)と「やっぱり」という語で結びついており、「戻る」、「最後」、「切り株」などとネットワークを作っているところから、物語をトータルでみても感想になっていることが分かり、物語後半部分の「切ない」、「思い」にも、比重があることが明らかとなった。また、データ数は学生群のほうが圧倒的に多いが、共起ネットワークの結果浮かび上がってきた語彙数は母親群のほうが多く、ネットワークの規模も大きかった。これらの結果から、学生群は母親群に比べて、絵本をありのまま素朴に受けとっていることが分かり、母親群のほうは、切な

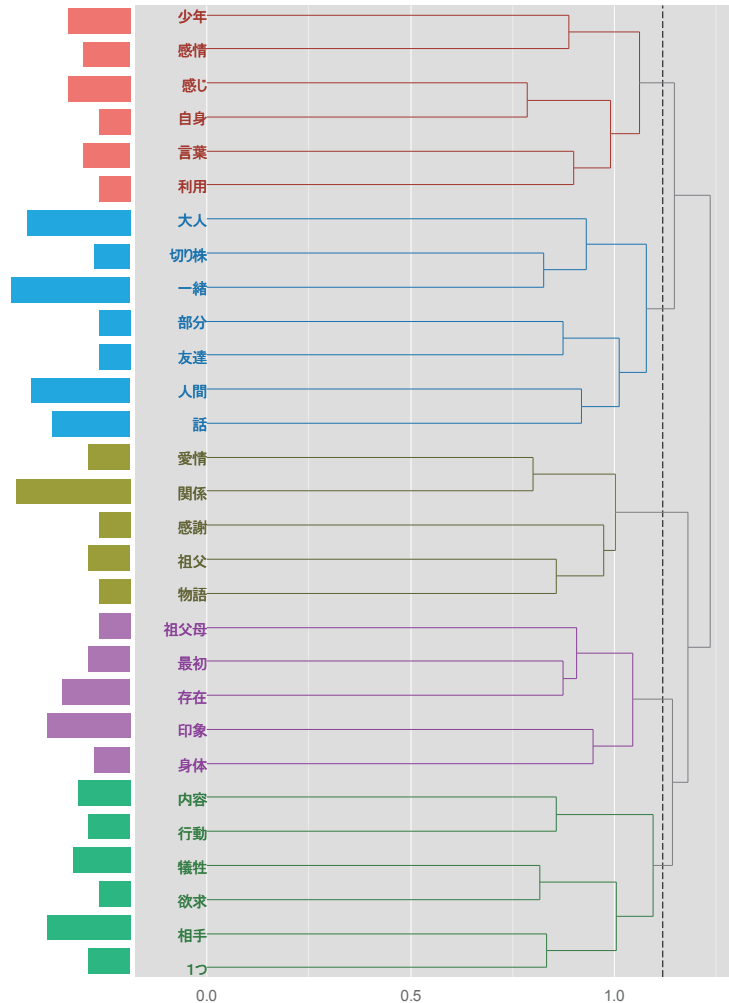


図3. 学生群の階層的クラスター分析

さを感じながらもそこに「愛」を感じていることが分かった。また、30名の母親に共通する要素が多いことも明らかとなった。

#### ④ 階層的クラスター分析

各群の階層的クラスター分析を図3、4に示す。分析にあたり、両群とも品詞を名詞とサ変名詞に絞り、平均回数以上、(平均+標準偏差)回数以下の出現回数の語に絞り、さらにクラスター数を5つに指定して分析をおこなった。

学生群の階層的クラスター分析結果からみえてくるのは、この物語を必ずしも母子関係としてだけみているのではないということである。図3では、第2クラスターで「友達」が出現している。「木」と「男の子」を友達関係として

捉えているのは、図4（母親群）にはみられないことであり、学生群に特徴的なものといえるであろう。また、図3の第3クラスターは、「愛情」、「関係」、「感謝」、「祖父」、「物語」で構成されており、続く第4クラスターにも「祖父母」が挙げられていた。生データをたどると、物語に回答者自身と祖父（・母）との関係を投影していることが明らかとなった（ex. **私は遠く離れた方の祖父母を思い出した。祖父母は私が遊びにいくと非常に喜んでくれ、食べきれないほごのごはん、おやつを用意してくれたり、自分がその家から帰るときには、何か持って帰りたいものはないかと聞いてくれたり、探したりと、「木」と似ているところが多くあると感**

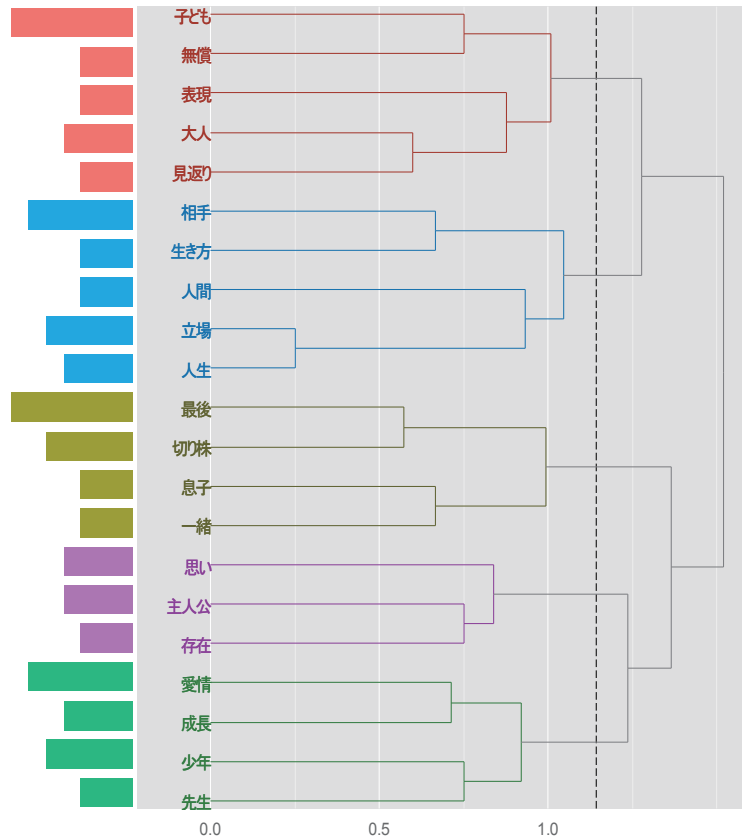


図4. 母親群の階層的クラスタ分析

じた。祖父母はそこまで重く考えていないと思うが、私は祖父母に自分の身を削ってまで何か欲しいと思わないし、祖父母がいてくれるだけで良いと思う。(以降省略)。一方、母親群(図4)では、第3クラスターに「息子」が出現していた。生データをたどると、回答者と自分の中高生の息子を「木」と「ぼうや」になぞらえてみていた(ex. ほぼ最後まで私は、木と自分自身を重ねて聞いていた。今、高校1年の息子がいる。「一緒に暮らせるのもあと2年か…」と思い、寂しく感じるが多かったので、余計に自分と重ねて聞いていた。息子のことを思うと「巣立ち」させたほうがいいのだが、親としてはとつてもとつても寂しい。いつまでも一緒に(近くに)いてほしいのだが。でも「おおきな木」の最後には、「ぼうや」は戻ってきてくれた。そして切り株に座って、「木」と「ぼうや」はゆったりとした時間を過ごした。「私もそうなるかな? なったらいいな!」と感じ、

今この絵本に出会えてよかったと思った)。学生群は、どちらかという自分を「男の子」に、母親群は、「木」に同一視し、両群とも自身のこれまでの相手との関係性のなかで、その体験を揺さぶられるような感覚になったことがうかがえる。

#### 総括

Baughan (2008 / 2009) によると、「おおきな木」は、アメリカで出版後、しばらくしてからその人気に火がつき、その後、様々な解釈がなされてきたという。キリスト教の聖職者のなかには、限りなく深い許しの心をもった「木」をイエス・キリストの象徴だと考える人たちがいる。一方、ハーバード大学のある有名な教授が「自己中心的な世代のためのおとぎ話で、ナルシズムの入門書で、搾取の問答書」と批判するように、「木」が子どもにとって良くない手本だという意見の人もある。また、最後に切

り株にまでなってしまったことから、環境破壊を訴えた本だと解釈する人たちもいる。フェミニストの間では、「木」が女性 (She) であることから、愛に目がくらみ人生を無駄にしているのに気づかない愚かな女性をテーマに挙げているとみられている。このように、賞賛と批判の両極端な評価を受けたり、社会的問題に切り込んだ本だと唄われたりするゆえんは、この本の「あいまいさのせい」(Baughan、2008 / 2009) だと根拠づけられている。ある意味、とてもあっさりした明快なストーリーだが、それでいながら見開き23ページ目の「だけど それはほんとかな。」や何度も繰り返される「きはそれでうれしかった。」に読者は翻弄される。臨床心理学も心理臨床の現場も、この「あいまいさ」を追求する学問であり、「あいまいさ」をもってよしとするような現場である。「奥行きのある」読み方ができる「おおきな木」は、臨床心理学的な価値も充分兼ねた備えた絵本であるといえるであろう。研究Iでは、「おおきな木」が日本の母子関係にみられるエッセンスが豊かに含まれていることを「甘え」や「母性」とともに考察した。そして、成長過程での母性の望ましいあり方について仮説を提示した。研究IIでは、若者世代、親世代ともに「おおきな木」の絵本に心が動いたことが分かり、その世代ならではの経験や人間関係を絵本に投射していたことも明らかとなった。今後、時代が進み、母性優位の父親が増えるに連れ、女性のなかの母性を改めて見つめ直す時期も訪れてくるだろう。子どもを育てていくときに、変容するものと変わらずそこにあるものがいったい何であるのか、今後の課題として継続して検討していきたい。

### おわりに

絵本「おおきな木」が、筆者を積極的に絵本の臨床心理学的な世界へ誘う先導者でもあり、この出会いなくして、本学で絵本ゼミなるものを展開してゆくことはできなかった。「おおきな木」の魅力は、Shel Silverstein はもとより、訳者の本田錦一郎の功績も大きい。五七調・七七調で訳された言葉は、読み聞かせをしても言

葉にテンポがあり、リズムカルで美しいのである。この本との出会いに、そして筆者のなかに「木」と呼べる人との出会いがあったことに感謝するとともに、これまで10数年味わい続け、さらになお読み続けることで、これからどんなふうに変わってくるのか、手に取るのが楽しみである。

### 文献

- Baughan, M. G. 2008 *Shel Silverstein (Who wrote that?)*. Chelsea House Publishers. 水谷阿紀子 (訳) 2009 おおきな木の贈り物—シェル・シルヴァスタイン (名作を生んだ作家の伝記) 文溪堂
- 土居健郎 1971 「甘え」の構造 弘文堂
- 浜野兼一 2015 絵本のストーリーを題材にした道徳の授業：『THE GIVING TREE (邦題「おおきな木」)』 by Shel Silverstein を手がかりとして 児童文化研究所所報37, 69-74.
- 樋口耕一 2014 社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して ナカニシヤ出版
- 本田錦一郎 1976 おおきな木 あとがき Shel Silverstein 1964b *The Giving Tree* Harper Collins Publishers. ほんだきんいちろう (訳) おおきな木 あすなる書房
- 金山由美・三林真弓・山北深香・迫きよみ・吉田佐妃 2016 からだを通じてここに働きかける子育て支援 平成27年度地域志向教育研究ともいき研究助成事業地域共同研究教育センター地域志向共同研究 研究成果報告書 (京都文教大学), 23-27.
- 金澤延美・山本長紀 2016文字なし絵本の作話課題からの一考察—短大保育科1年生と小学校4年生対象の比較を通して— 駒沢女子短期大学研究紀要49, 1-10.
- 片瀬拓弥 2015 インタビュ自己評価表のテキストマイニング分析 清泉女学院短期大学研究紀要34, 1-10.
- 片瀬拓弥 2016 反転授業後の記憶保持と感想文内容との関連性に対するテキストマイニング分析 清泉女学院短期大学研究紀要35, 12-21.
- 河合隼雄 1978 新しい教育と文化の探求 創元社
- 河合隼雄 1997 母性社会日本の病理 講談社
- 香山リカ 2010 ニッポン母の肖像 NHK 歴史は眠らない6 (14), 63-133.
- 榎木貴之 2012 国語教育が英語教育と連携する意義と方法について：『おおきな木』(The Giving

- Tree) を用いた大学授業を例に 全国大学国語教育学会発表要旨集122 301-304.
- 三林真弓 2000 不登校児がクラスに戻るまで—養護教諭との連携から— お茶の水女子大学発達臨床心理学紀要 第2号 51-62.
- 三林真弓 2008 プレイセラピー教育の試み—ロールプレイ実習のビデオ検討を通して— 京都文教大学心理臨床センター紀要 第10号 101-109.
- 守屋慶子 1994 子どもとファンタジー 新曜社
- 村上春樹 2010 おおきな木 訳者あとがき Shel Silverstein 1964c *The Giving Tree* Harper Collins Publishers. 村上春樹 (訳) おおきな木 篠崎書林
- Shel Silverstein 1964a *The Giving Tree* Harper Collins Publishers.
- Shel Silverstein 1964b *The Giving Tree* Harper Collins Publishers. ほんだきんいちろう (訳) 1976 おおきな木 あすなろ書房
- Shel Silverstein 1964c *The Giving Tree* Harper Collins Publishers. 村上春樹 (訳) 2010 おおきな木 篠崎書林
- 高石恭子 2003 現代女性にとって母性を生きたことの意味—人魚の物語に見られる母娘 像の考察 松尾恒子・高石恭子 (編) 現代人と母性 新曜社 Pp. 213-234.
- 鳥丸佐知子 2015 保育士養成関連授業は学生の何を変えたのか—「保育者」イメージを中心に— 京都文教短期大学研究紀要54, 41-46.
- 植田都 1996 絵本「おおきな木」に見られる日本人母親の子育て観 聖和大学論集24, 281-294.

**ABSTRACT**

## Clinical Psychological Consideration of The Picture Book “*The Giving Tree*”

—Using Quantitative Text Analysis—

Mayumi MITSUBAYASHI

The theme of this paper is the picture book “*The Giving Tree*” translated by Kinichiro Honda (Shel Silverstein, 1964/1976). Research I explores a literature research on a thesis about “*The Giving Tree*.” Research II examined the impressions of students group ( $N=144$ ) and mothers group ( $N=30$ ) after reading the book, using quantitative text analysis.

Research I considers not only that the book contains a lot of essences that can be found in Japanese mother-children relationship but also “Amae” and “Motherhood.” Then tried to make a hypothesis on the desirable role of motherhood in the growth process.

Research II discovers both the younger generation and the parent generation were impressed by the picture book. Moreover, it also finds that the experiences and human relations peculiar to their ages are being projected on this picture book. As the time goes through, more and more fathers acquire maternity; then, it is necessary that the maternity in mothers should have been re-examined. Further studies are needed in order to consider what is needed to raise children.

The picture book “*The Giving Tree*” invites me to the clinical psychological world of picture books. I would like to show my appreciation to the meeting with this book and thanks to the encounter with the woman called “tree” in me.

**keywords** the picture book, “*The Giving Tree*”, quantitative text analysis